

2028

# 紙製のパッケージ

Paper-Made Package

AD 33 丸山 愛  
指導教員 杉島 一男

## 1.研究目的

近年、プラスチックで作られたパッケージが至る所で見られる。耐久性や耐水性、密閉性に優れたプラスチックは今や様々なパッケージに使われているが、その一方でプラスチックによる環境問題が増えつつある。

そこで、再利用しやすく環境に優しい素材である紙の特性を見直しパッケージを作成することを本卒業研究の目的とした。

## 2.調査と分析

環境問題については、プラスチック総生産量に対して大半が廃棄物として排出されており、大抵のプラスチックが石油で作られるため石油問題などに関わってくる。

紙のリサイクルは国内の紙のリサイクル率は60%で、牛乳パックなどのラミネート紙も再生可能だが、厚紙のパッケージは潰しにくい・かさばるなどリサイクル性がよくない。

紙の利点としては、リサイクルが容易で、軽く、加工しやすく吸湿性・通気性に優れている。欠点は、耐久度が低く、水に弱いことが挙げられる。

## 3.コンセプトの立案

- 簡単に折りたためて、リサイクルしやすいパッケージ。
- プラスチックにできない素朴感・高級感を持たせたデザイン。
- 対象商品を紙パッケージをイメージしやすい和菓子に設定、羊羹などで有名な『虎屋』をモデルとし、高級和菓子店にある「古い」「堅苦しい」というイメージが強いと感じたため「若者にも受け入れられる『虎屋』をつくる」ことをイメージした。

## 4.デザイン展開

・単体商品のパッケージと、セットにするための箱の両方を手がけた。どちらも1枚の紙(長方形 or 正方形)に戻ることにより主眼を置き、潰しやすく、また潰した後にはリサイクルに出しやすい形を目指したが、最終的に箱は折りたたんでまとまるようにした。

・箱は高級感を出すため厚みをもたせた間仕切りをつけ、額縁と間仕切りを一体化して一枚の紙になるようにした。試作段階で組み立てるときに紙の厚みなど

で寸法が狂い、長さが合わない等の問題が生じたため、寸法を細かく変えながらじっくりまで何度も作り直した。

・パッケージは八角形の取り出しやすい形にし、折り方を若干変えることでバリエーションを出した。糊付けは一切しないため、開くとそのまま一枚の紙になる。

・さらに外箱に和紙を貼り、中に入れるパッケージにも千代紙を使うことで和風な感じを出した。

## 5.完成図



## 6.結論

製作した箱とパッケージを虎屋の広報部の方に見ていただいたところ、「和紙や千代紙を使っていることで和菓子の感じが出ている」「糊付けが無いのでコストが低くなる」という評価をいただいたが、あまり厚みをつけると法律に引っかかることや、全国規模で作ると手間がかかり過ぎることを指摘された。

他に、十代の若者を中心にアンケートをとったところ「高級感がある」「パッケージの折り方や柄がきれい」等の評価をもらったが、「箱がシンプルすぎる」「パッケージの色が落ち着き過ぎている」「折り方をもっと個性的にしたほうが良い」という意見ももらった。

当初の目的の「リサイクルしやすい紙パッケージを作る」という点においては概ね成功したと思うが、デザイン的にはまだまだ改善の余地があると感じた。

## 7.参考文献

S.Lianshun, H.Lang 2007 『Make a BOX』BNN新社  
小林 一夫 2002 『オリガミ雑貨Book』文化出版局